

## ■ハンド基準の具体化

### ▼「反則」

①手や腕をボールの方向に動かす場合を含め、手や腕を用いて意図的にボールに触れる。

②ボールが手や腕に触れた後にボールを保持して、またはコントロールして、

「相手競技者のゴールに得点する」「得点の機会を作り出す」。

③ゴールキーパーを含め、偶発的であっても、手や腕から相手チームのゴールに直接得点する。

①はこれまでと同様。②と③は新たに登場した基準。今後は手や腕にボールが当たった後に、ボールがゴールに入ったり、ゴールにつながる決定機につながったりした場合は、意図的な行為でなくてもハンドの反則となる。

### ▼「通常は反則」

①手や腕を用いて競技者の体を不自然に大きくした。

②競技者の手や腕が肩の位置以上の高さにある。

今回の改正では「手や腕の位置」の重要性が高まった。これまでのルールでも「手や腕の位置」は基準の一つに採用されていたが、あくまでも「意図的かどうか」を判断するための一つの材料との位置付け。しかし、今回の改正によって「反則かどうか」自体を判断する基準に格上げされた形だ。

もっとも、「反則」ではなく「通常は反則」という表現のとおり、そこに主審の主観が介在する余地は少なからずある。

女子 W 杯決勝トーナメント 1 回戦の日本対オランダ戦では、DF 熊谷紗希のハンドが物議を醸したが、今後も「どこまでが不自然なのか」といった議論は続くことになりそうだ。

なお、規則には「競技者が意図的にボールをプレーしたのち、ボールがその競技者の手や腕に触れた場合を除く」(= ハンドではない) という付記もなされている。たとえば選手が意図的にボールを蹴った直後、そのまま自身の手や腕に当たったケースだ。もしその場合、手や腕が不自然な位置にあったとしてもハンドの反則にならない。

### ▼「通常は反則にならない」\* (「反則」「通常は反則」にあたる場合を除いて…)

①競技者自身の頭または体から直接触れる。

②近くにいた別の競技者の頭または体から直接触れる。

③手や腕が体の近くにあり、競技者の体を不自然に大きくしていない。

④競技者が倒れ、体を支えるための手や腕が体と地面の間にある。ただし、体から横または縦方向に伸ばされていない。

今回の改正では「反則にならない」項目が新たに明示された。これにより、議論が分かれそうな場面でもノーファウルの判断がしやすくなった。もっとも、これらの基準はあくまでも「反則」「通常は反則」でないことを前提にしたもの。

①、②にあたる場合でも「手や腕の位置」が悪ければファウルを取られる点は注意しておきたい。

### ▼FK の壁入り禁止

フリーキックが行われるとき、**3人以上**の守備側チームの競技者が作る『壁』から、攻撃側チームの競技者が 1m 以上離れる。離れていない場合、相手チームの間接フリーキックが与えられる。

すなわち、攻撃側の選手は守備側の「壁」から離れる必要が出てきた。

### ▼ゴールキックの変更

「ボールが蹴られて明らかに動いた時」にインプレーとなる。

もっともこの変更によって、攻撃側の選手はペナルティーエリア内でゴールキックを受けることができるようになり、戦術的な幅が広がる。また相手競技者はこれまでどおり GK が蹴るまではエリア外にいなければならないため、自陣からパスをつないでいくチームにとっては有利に働きそうだ。

ちなみに、相手競技者がエリア内に残っている場合でも、急いでゴールキックを蹴ることはできる。しかし、GK が蹴った瞬間に

ボールはインプレーとなるため、相手競技者はすぐさまパスカットをすることが可能。そのため、失点に直結するリスクを避けたいGKにとっては注意が必要となりそうだ。

#### ▼交代時は近くの境界線から退場

これまで交代が告げられた選手はハーフウェーライン付近からピッチを去るのが一般的だった。しかし今回の改正により、審判が特定の指示をした場合を除き「競技者は境界線の最も近い地点から出なければならない」という決まりとなった。

8人制の場合に適用されるのはGKのみ。GKの居る位置より最も近い地点より出る。FPは交代ゾーンよりの自由交代。

#### ▼コイントスのボール選択

これまでコイントスでは、勝ったほうがエンドを選ぶ(=「前半に攻めるゴールを決める」)ルールだったが、今回の改正で**ボール**を選ぶこともできるようになった。

#### ▼ドロップボールの変更

これまでドロップボールは両チームの選手が参加し、先にボールを触ったほうが相手チームにボールを返すのがマナーとされていた。しかし、今後は「最後にボールに触れたチームの競技者の1人だけが参加し、「他のすべての競技者は、インプレーになるまで4m以上ボールから離れなければならない」ことになった。

さらに主審の扱いも変化。審判員に**ボールが当たった後に**

- ①チームが大きなチャンスとなる攻撃を始める
- ②ボールが直接ゴールに入る
- ③ボールを保持するチームが替わる—場合はドロップボールでの再開となる。

今後は「主審は石だと思え」という常套句は通用しなくなりそうだ。

#### ▼決定機阻止でもリスタート可能に

これまでは「主審が警告または退場と判断した場合、懲戒の処置をし終えるまでプレーを再開させてはならない」というルールがあったため、もしアドバンテージが判断されるような状況であっても、カードが提示されるまでプレーを再開することはできなかった。

しかし、今回の改正では「ただし、主審が懲戒の罰則の手続きを始めておらず、反則を犯していないチームがすばやくフリーキックを行って、明らかな得点の機会を得た場合を除く」という文言が追加。攻撃側がチャンスを続けたい場合、急いでリスタートすることが可能になった。

これにより、チャンスシーンがファウルによって途切れさせられることが少なくなり、よりダイナミックなサッカーが期待できるようになる。しかし、もし決定機阻止による退場が適切な場面でも、リスタートした場合は警告処分に変更。「攻撃側の決定機は阻止されていない」という扱いになるためだ。

#### ■その他、細かい主な変更点

- ・監督・コーチもカードの対象に(行為者が特定できない場合は監督が処分)。
- ・GKのスローイングが相手ゴールに入った場合は相手ゴールキックで再開。
- ・言葉による反則は間接FKで再開。
- ・PKが蹴られるまでの間、GKはポスト、バー、ネットに触れてはならない。